

〈事例報告2〉「漢文の読解により論理的思考を深化しよう」（古典B）

1 はじめに

「受験生を担当するジレンマに向き合ってみよう」、そう思ったのが本実践のきっかけであった。一つは、アクティブ・ラーニング型授業と受験指導に関するジレンマである。生徒が主体的に問題を発見し、協働的に解決していくアクティブ・ラーニング型授業に手応えを感じる日々ではあるが、他方で、効率よく知識を注入し解法パターンを教え込むという受験指導が、成果をもたらすことも否定はできない。「新しい取組＝善」で「昔ながらの受験指導＝悪」だと述べる気はない。生徒の進路実現を目標にする学校現場では、いずれも必要でいずれも重要だからである。ただ、その時間の目的を焦点化するために、私の授業は、受験指導かアクティブ・ラーニング型授業かの二者択一になってしまいがちであった。なんとか調和を図ることができないか。

もう一つは、現代文の授業と古典の授業に関するジレンマである。ともすると、古典では文法や単語などの知識指導が多くなり、読解に必要な文章展開はじっくり説明しているものの、論理的思考の指導は現代文がメインになっている。だからといって、論理的思考力の育成は現代文が担うもので、昔の人の言葉である古典ではその力が養えない、というわけでもないだろう。そもそも、現代語は古典を受け継いで成立している。どうにか古典を学習する中で現代文並みに論理的思考力の育成を図ることができないか。

これら二つのジレンマを解決しようと考えたのが、「漢文の読解により論理的思考を深化しよう」という本実践である。アクティブ・ラーニング型授業でありながら受験に役立ち、かつ、古典の言葉を使って論理的思考力を養うことができる試みかもしれない。協働して漢文の論理構造を考え、読み解く過程を通して、論理的思考を深化させていくのである。

2 指導目標と評価

(1) 身に付けさせたい力(論理的思考に関わる目標)

文章の構造に注目して読む力

漢文の構造を追求する過程で、生徒に論理的思考力が養われていくと考える。そのために必要なのは、授業形態の工夫である。教師主導型の授業では、途中で理解不十分なところがあっても、一応ゴールまでたどりつくことができる。生徒は分かったような気分になるが、後に自分一人で読解プロセスを再現することは難しい。自力で読みながら、疑問を抱いたときに質問できるとよいが、他の生徒の目を気にして質問しづらいと感じる者もいるにちがいない。

そこで「少人数の生徒同士」という枠組みを設定し、心理的ハードルを下げたい。自分の力で解決できない課題に対して、他者に学びながら解決していく姿勢は大切である。学習者の「自分」と、協働学習する「仲間」と、サポートする「教師」が三位一体となって読解していく授業が望ましい。

(2) 関係する学習指導要領の指導事項

古典に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解すること。〈古典B(1)ア〉

(3) 関係する論理的な思考の活動

事象の関係性について洞察する力(④関係・洞察)

(4) 評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
課題解決に向けて積極的に協働し、論理構造に注目した読みをしようとしている。	課題解決に向けて積極的に協働し、論理構造に注目した読みをしている。	古典の言葉と現代の言葉には連続性があることを知り、一続きの言語文化と捉えている。

(5) 評価方法と評価基準表

ア 評価方法

評価規準を基に「ワークシートⅥ・Ⅶ」や「授業中の発言・行動」を評価する。特に「読む能力」については、作成した評価基準表（ルーブリック）を使用する。

イ 「読む能力」の評価基準表（ルーブリック）

評価A	評価B	評価C
論理構造に注目した読みを、継続的にしている。	論理構造に注目した読みをしている。	論理構造に注目した読みができなかった。

3 単元の指導計画

(1) 言語活動と教材

言語活動：漢文の構造を理解し、論理性や主張を読み取ること。

教材：『列子』（1996年度センター試験「国語Ⅰ・Ⅱ」本試問題）

(2) 単元観・教材観

ア 単元観

語句や句形を押さえて現代語に置換するとともに、接続や例示など論理構造について考えることができる。古典の文章と現代の文章には共通の論理性があることを知り、伝統的な言語文化に親しむ態度を育むことができる。また、課題に協働で取り組み解決を図る体験が、科目への興味・関心を引き出すことにつながる。

イ 教材観

現代文の評論に似た論理展開を読み取ることができる。漢文の読解にも構造の把握が重要であることを認識させたい。また、センター試験の過去の問題を扱うため、生徒の真剣度・集中度が増すことが予想される。協働学習がより活発なものになることを期待したい。

(3) 指導と評価の計画（配当時間 2 時間）

次／ 時間	学習活動	言語活動に関する 指導上の留意点	◇評価規準，◆評価方法， *努力を要する状況と評価し た生徒への支援の手だて
第 1 次 （ 1 時 間）	①文章を読解し、自分が理解できていない内容を確認する。 ②自分と他者との問題解決に向けて、協働学習を行い、文章の理解を深める。 ③比較検討する。	①理解不十分な部分を明確にさせ、漠然とした話し合いにならないように注意させる。 ②三人のチームを組み替えながら、多様な考えに触れるようにさせる。 ③模範の解答を参照させる。	◇漢文に用いられている語句の意味や文法事項を正しく読み取っている。 ◆記述の分析（ワークシート I～III） *漢和辞典や文法書を使い調べられるように指導する。
第 2 次 （ 1 時 間）	①論理的な読解方法を理解し、論理構造を記号化して考える。 ②本文の主張に対する適切な例示を新たに考える。 ③自己評価する。	①恣意的な読解にならないように、現代文の読解方法と関連させて論理的に読ませる。 ②例示を考える過程で自分の理解の度合いを把握し、例示の適切さを他人と議論することで更に理解を深めさせる。 ③自己を客観視させる。	◇論理構造を記号化し、協働しながら論理構造に注目した読みをしている。 ◆発言・行動の観察 ◆記述の分析（ワークシート VI・VII） *選択式の質問を重ねて理解が進むように指導する。

4 学習活動の実際

(1) 学習に取り組む生徒の姿

教員の解説を真面目に聴き、膨大な知識を暗記していくことが受験勉強と思い込んでいる生徒たちは、視野を広げたようであった。自分が分かることを同級生に教える、自分が分からないことを同級生に教わる、どちらも刺激的な体験となった。ふだん集中力に欠ける生徒も楽しみながら活動を行い、授業が活性化した。時間を決めて何度も席を移動し、多くの他者と協働する方式を採用したことで、さまざまな読み方・考え方に触れることができ、読みの多様さに驚く者が多かった。また、日頃会話の少ないクラスメートとも、チームを組んで課題に取り組んだため、クラスの仲が深まるきっかけとなったのは副産物であった。

(2) 「身に付けさせたい力」の実現状況と生徒の回答例

ア 自己評価の結果

自己評価	A	B	C
①疑問点を積極的に話し合うことができた。（トレーニング 7）	60%	37%	3%
②相談することで本文の理解が深まった。（トレーニング 7）	71%	26%	3%
③文構造や書き下し文を理解することができた。（トレーニング 9）	26%	67%	7%
④語句の意味や筆者の論の流れを押さえられた。（トレーニング 9）	29%	62%	9%
⑤主体性・協働性（課題解決に向けた姿勢）（トレーニング 15）	55%	45%	0%
⑥読解力（論理的思考の実感）（トレーニング 15）	39%	61%	0%

前ページの表は、生徒がワークシートに記入した自己評価をまとめたものである。①・②から、協働的に取り組む学習は、生徒が積極的になれる方法であり、大半の生徒が効果を感じていることが分かる。ただし、生徒同士で読解を進めるため、授業者が教える授業と比べると、理解が不十分なところもある。それが③・④においてA数値が低い要因となっている。論理的思考に焦点化した発展問題に対しては、前向きな姿勢が継続されていた（⑤より）。そして本実践の核心と言える⑥の問いには、C（論理構造に注目した読みができなかった）と答えた生徒はおらず、全ての生徒にとって、テキストの論理性に着目する機会となったようである。

イ 生徒の挙げた「昔も今も変わらないもの」具体例（トレーニング 14）

(ア) 「個人の五感」例の一部

- ・ 満開の桜など自然の風景を見て美しいと感じる美的感覚
- ・ すばらしい音楽を聴きながら食べる料理の味
- ・ 鼻につく排泄物や生臭い血に対する不快感

(イ) 「個人の身体」例の一部

- ・ 雷鳴や地震の揺れ、高所からの飛び込み、といった本能的恐怖
- ・ 病気やケガをして衰弱していく身体
- ・ 家の中に入ると外部から遮断される安心感

(ウ) 「生活・社会」例の一部

- ・ 祭りは楽しいもの、結婚式は幸せなもの、葬式はつらいもの
- ・ 生活費の確保に明け暮れ、リストラ・借金におびえる
- ・ 職場の上下関係に悩み、利害が絡む上役に媚びへつらう

(エ) 「国家・政治」例の一部

- ・ クーデター、革命、戦争はいつでも起こり得る
- ・ 天皇など国には特権階級があり、為政者は庶民に課税する
- ・ 警察・軍隊のような治安維持集団が必要

ウ 生徒の感想

(ア) 「プラスの意見」

- ・ ふだんは一人で考え先生の解説を聞いて終わっていたが、みんなと答えを探していく中で、違う観点から文章を読むことができた。思いもよらなかった意見をもつ人がいたり、自分と全く同じの意見をもつ人がいたり、真逆の意見をもつ人がいたり、たくさんの刺激を受けた。他の人の解釈と比べることはとても参考になったし、みんなが分かっているのに自分は分かっていないところは勉強不足だと痛感した。
- ・ 自分一人だと、本文を理解しきれずあやふやなまま問題を解いていたが、今回は疑問点を話し合ってから問題に取り組んだので、いつもよりすらすらと問題が解けた。記号を付けたら具体例を考えたりすると文章の理解がしやすかった。今まであまり話したことのない人たちとも話すことができた。分かった瞬間を共有し、答えに近づいていく楽しさがあった。自分の意見にみんなが納得してくれるとうれしかった。

- ・ 現代文のことを漢文に取り入れるのは新鮮だった。そして個人で問題を解くよりも、チームで考えた方が問題に対しての意欲が違うような気がした。決して長い漢文ではないのに、話題が尽きることなく、飽きることがなかった。互いに考えの幅が広がり、とても有意義な時間を過ごせた。

(イ) 「マイナスの意見」

- ・ あきらめずに話し合うことはできたが、お互いに分からなくて進まないときがあった。チームに優秀な人がいるときはスムーズだった。
- ・ なんとなく話の流れはつかめたが、理解に時間がかかった上、まだ分からない部分がある。自分たちでやるにはまだ知識が足りないなので、やっぱり先生に教えてもらいたい。
- ・ 自分からあまり話せなかった。聞かれたら答えたが、他の二人の会話を、聞いていることが多かった。何をどう話せばいいのか難しかった。真ん中に座っている人が話しやすい人や気が利く人だと会話がはずむかもしれない。
- ・ 文構造は現代文でも苦手。よく分かっていたいなかったので漢文だともっと分からなかった。

5 おわりに

漢文のアクティブ・ラーニング型授業によって論理的思考力を養い、かつ受験にも役立たせるというのが本実践の目標であった。学習者の「自分」と、協働学習する「仲間」と、サポートする「教師」が三位一体となって読解していく授業を目指した。

昨今アクティブ・ラーニング型授業の開発が進んでおり、方法は多い。本実践は果たして効果的だったか。

教員が通常授業で解説した後に、内容をグループでまとめて発表する、といった形態は避けたかった。生徒の発想が無難なものにとどまってしまう恐れがあるからだ。教員に教えられた知識をパッチワークのように見栄えよく組み合わせることは、生徒の可能性を狭め、思考を深める機会を失わせるだろう。生徒自身が自由に思考し、発言する度合いを高めたい。

そこで今回、明快な論理性をもつ漢文を教材とし、多くの他者と話し合う学習活動に重きを置いた。他人の意見に流されてしまったり、質問を躊躇したりする生徒も見受けられたが、多くの生徒がチームでの読解にモチベーションを上げて取り組み、ともに答えに近付いていく喜びを実感したようであった。生徒の自己評価のデータからも効果を読み取ることができる。

本実践は拙いながらも一定の成果を得たのではなからうか。改善すべき点は、理解が十分でない生徒にどのようにヒントを与えるか、話すことが苦手な生徒にどのように関わりをもたせるか、などいくつもある。今後十分に検証を重ね、よりよい指導計画を立てて、次の実践に役立てたい。

「チームで読解力強化！漢文ロジック」ワークシートI

3年（ ）組（ ）番 氏名（ ）

【トレニング1「個人戦」実力の把握】 次の文章はセンター試験本試の過去問です。まずは自分一人の力で読解してみよう。

孟孫陽問^{マウソウヤウ}楊子^{ヒツヤウシ}曰^{ハク}、「有^リ人^ニ於^ニ此^ニ、貴^レ生^ヲ愛^シ身^ヲ、以^テ求^ムレ^テ不^レ死^セ。可^ク乎^カ。」曰^{ハク}、「理^ニ無^ク不^レ死^ス。」
 「以^テ求^ム久^ク生^ヲ、可^ク乎^カ。」曰^{ハク}、「理^ニ無^ク久^ク生^ヲ。」^R生^ハ非^ズ貴^シレ^テ之^ニ所^ニ能^ク存^ス。身^ハ非^ズ愛^シレ^テ之^ニ所^ニ能^ク厚^シ。且^ツ久^ク生^シ奚^ニ為^{ラン}。五^ノ情^ノ好^ム惡^ム、古^ノ猶^ホ今^ノ也^{ナリ}。四^ノ体^ノ安^ク危^ク、古^ノ猶^ホ今^ノ也^{ナリ}。世^ノ事^ノ苦^シ樂^シ、古^ノ猶^ホ今^ノ也^{ナリ}。變^ニ易^ニ治^ル亂^ス、古^ノ猶^ホ今^ノ也^{ナリ}。既^ニ聞^ク之^ヲ矣^{ナリ}。既^ニ見^ク之^ヲ矣^{ナリ}。既^ニ更^レ之^ヲ矣^{ナリ}。百^ノ年^ノ猶^ホ厭^ム其^ノ多^ク。況^シ久^ク生^シ之^ノ苦^シ也^{ナリ}乎^カ。」
 孟孫陽曰^{ハク}、「若^シ然^ラ、速^ニ亡^シ愈^ニ於^ニ久^ク生^ニ。」則^チ踐^キ鋒^ノ刃^ヲ、入^リ湯^ノ火^ニ、得^ル所^ニ志^ス矣^{ナリ}。」楊子曰^{ハク}、「不^レ然^ラ。既^ニ生^シ、則^チ廢^レ而^シ任^ス之^ヲ、究^ム其^ノ所^ニ欲^ス、以^テ俟^ツ於^ニ死^ニ。」將^シ死^ス、則^チ廢^レ而^シ任^ス之^ヲ、究^ム其^ノ所^ニ欲^ス、以^テ放^ツ於^ニ盡^ニ。」
 無^ク不^レ廢^ス、無^ク不^レ任^ス。何^ニ遽^ニ遲^ニ速^ニ於^ニ其^ノ間^ニ乎^カ。」

（『列子』揚朱篇第十章）

【注】孟孫陽…人名。楊子の弟子。 子…戦国時代の人、揚朱。 五情…耳、目、鼻、口、肌の五官の感覚。
 四体…からだ。 鋒刃…鋭いやいば。 廢…作為をくわえないで、そのままにしておく。 放…至る。

【トレニング2「無知の知」課題の発見】 ①本文右側に文構造 S（主語）V（述語）O（目的語）C（補語）副（副詞）接（接続語）前（前置詞）などを書こう。②また本文に、自分だけでは意味が分らず他の人に現代語訳を助けてもらいたい部分を○で囲もう。

孟孫陽問楊子曰、「有人於此、貴生愛身、以求不死。可乎。」曰、「理無不死。」「以求久生、可乎。」曰、「理無久生。生非貴之所能存。身非愛之所能厚。且久生奚為。五情好惡、古猶今也。四体安危、古猶今也。世事苦樂、古猶今也。變易治亂、古猶今也。既聞之矣。既見之矣。既更之矣。百年猶厭其多。況久生之苦也乎。」

孟孫陽曰、「若然、速亡愈於久生。則踐鋒刃、入湯火、得所志矣。」楊子曰、「不然。既生、則廢而任之、究其所欲、以俟於死。將死、則廢而任之、究其所之、以放於盡。無不廢、無不任。何遽遲速於其間乎。」

【トレニング3「三本の矢」(協働による理解)】 横並びの3人組で「文構造」「現代語訳」について疑問をぶつけ合い、解決を図ろう。

【トレニング4「新戦力」(協働による理解)】 右端の者は前席へ、左端の者は後席へ移動。新3人組で更なる解決を図ろう。(計2回)

「チームで読解力強化！漢文ロジック」ワークシートⅡ

【トレーニング5「再挑戦」(協働効果の確認)】 チームで教え合ったことを踏まえ、個人で実際の設問に当たろう。

問一 傍線部(1)「好」、(2)「易」と同じ意味で用いられているのはどれか。次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

- (1) 好 ① 愛好 ② 好評 ③ 好況 ④ 好調 ⑤ 良好
 (2) 易 ① 簡易 ② 交易 ③ 容易 ④ 難易 ⑤ 平易

問二 傍線部A「理無不死」とはどういう意味か。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 真理は滅びるものではない。 ② 真理も滅びないものではない。 ③ 道理として死ぬものはいない。
 ④ 道理として死なないものはない。 ⑤ 道理なくして死ぬことはできない。

問三 傍線部B「生非貴之所能存」、D「速亡愈於久生」の読み方として最も適当なものはどれか。次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

- B ① 生は之^ゆくを貴^ひび能^を存^する所に非^ず。 ② 生は之^これを貴^んで能^く存^する所に非^ず。
 ③ 生は之^これ貴^ばれて能^を存^する所に非^ず。 ④ 生は之^ゆくを貴^んで能^く存^する所に非^ず。

⑤ 生は之^これ貴^ばれて能^く存^する所に非^ず。

D ① 速^き亡^のれは久^しき生^を愈^やさす。 ② 速^き亡^のびは久^しき生^に愈^やさる。

③ 速^{やかに}亡^ぼるは久^{しく}生^きくるに愈^まる。 ④ 速^{やかに}亡^のるも久^{しく}生^きくるは愈^まる。

⑤ 速^{やかに}亡^ぼるより久^{しく}生^きくるは愈^まる。

問四 傍線部C「久生奚為。」と、楊子がここでいっているのはなぜか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、一つ選べ。

① 生きていく苦しみは耐えがたく、またそこには価値も見いだせないのだから、むしろはやく死んだほうが長生きするよりはましだ、と思っっているから。

② 人のいのちは短くはかないものであり、それは昔も今も変わらないことなのだから、長生きしようあくせくするのは愚かな努力にすぎない、と思っっているから。

③ 真理は過ぎてゆく時間の上にか含まれておらず、時がうつろえばすぐに捉えがたいものとなってしまうので、これ以上生きながらえてもむだだ、と思っっているから。

④ 人の営みはいつの時代も変化はなく、それをひとたび経験した者には百年の寿命でさえ長過ぎるのに、ましていつまでも生きていく苦しみは耐えがたいものだ、と思っっているから。

⑤ 長生きしたとしても人々の営みのすべてを追体験できるわけではなく、しかも新しい体験もそこでは見いだされないので、長寿のための努力はむなしいことだ、と思っっているから。

問五 傍線部E「得所志矣。」、F「以俟於死。」とはそれぞれどういうことをいっているのか。文中の別の語句(波線部)で答えるとすればどれがふさわしいか。最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

- E ① 愛身 ② 不死 ③ 速亡 ④ 久生 ⑤ 遅速
 F ① 安危 ② 苦樂 ③ 治乱 ④ 更 ⑤ 死

問六 本文からうかがえる楊子の主張として、最も適当なものはどれか。次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 人はこの世の苦しみをいつまでも経験するぐらいなら、むしろ早死にするほうがよいのであり、延命のためのでたてを捨てて、長生きに執着すべきではない。

② 人は生きる苦しみにたじろがず死をも恐れず、禁欲的に自らを律しながら、与えられた生を素直に受け入れて、その結果として穏やかな死を迎えるのがよい。

③ 人はこの世に生まれたからには、身を大切にいたわり命を十分にいとおしんで、不老長寿を求めるのがよいのであり、早死に願うなどもつてのほかである。

④ 人は生の苦しみに打ち勝ち、古今東西のさまざまな体験をわがものとして、日々の生活を充実したものとすべきであって、幸せの到来の速い遅いは問題とすべきではない。

⑤ 人はこの世に生まれたからには、自らに忠実に行動して、余計なはからいを捨て生や死をありのままに受け入れるのがよく、そこでは早死にや長生きなどは問題にならない。

【トレーニング6「三本の矢」(協働による理解)】 席を移動する。個人ではわからなかった設問を3人組で解決しよう。

【トレーニング7「振り返り」(自己を客観視)】 団体戦で過去問に当たった自己評価と感想を記そう。

☆疑問点を積極的に話し合うことができた	A B C	感想
☆相談することで本文の理解が深まった	A B C	

「チームで読解力強化！漢文ロジック」ワークシートⅢ

【トレーニング8「照合」(理解の補完)】 解答と照らし合わせる。3人組で話し合い、理解を深めよう。

【設問正解】

問一 (1) ① (2) ② 3点×2 問二 ④ 6点 問三 B② D③ 5点×2 問四 ④ 8点
 問五 E ③ F ⑤ 6点×2 問六 ⑤ 8点

【文構造】

S V C V V S C V O V O 接 V O V C V S 接 V 副 S V
 孟孫陽 問 楊子 曰、「有人 於此、貴 生 愛 身、以 求 不 死。可 乎。」 曰、「理 無 不 死。」 「以 求 久 生、可 乎。」
 V C V 副 S S V V O S 副 V S V V O S 副 V 接 副 O V S V S
 曰、「理 無 久 生。生 非 貴 之 所 能 存。身 非 愛 之 所 能 厚。且 久 生 奚 為。五 情 好 惡、古 猶 今 也。四
 V S S V V S V 副 V O 強 副 V O 強 副 V O 強 S 副 V O
 体 安 危、古 猶 今 也。世 事 苦 樂、古 猶 今 也。 變 易 治 乱、古 猶 今 也。 既 聞 之 矣。既 見 之 矣。既 更 之 矣。 百 年 猶 厭 其
 比 副 O 比
 多。 況 久 生 之 苦 也 乎。」

S V V 副 V V C 接 V O V C V S 強 S V V S 接 V 順 V O
 孟孫陽 曰、「若 然、速 亡 愈 於 久 生。則 踐 鋒 刃、入 湯 火、得 所 志 矣。」 楊子 曰、「不 然。既 生、則 廢 而 任 之、
 V O 接 V C V 接 V 順 V O V O 接 V C V S V S 反 S C 反
 究、其 所 欲 以 俟 於 死。將 死、則 廢 而 任 之、究 其 所 之、以 放 於 尽。無 不 廢、無 不 任。 何 遽 遲 速 於 其 間 乎。」

【書き下し文】

孟孫陽楊子に問ひて曰はく、「此に人有り、生を貴び身を愛し、以て死せざらんことを求む。可ならんか」と。曰はく、「理として死せざるは無し」と。「以て久しく生きんことを求むるは、可ならんか」と。曰はく、「理として久しく生くるもの無し。生は之れを貴んで能く存する所に非ず。身は之れを愛して能く厚くする所に非ず。且つ久しく生くること奚ぞ為さん。五情の好悪は、古猶ほ今のごときなり。四体の安危は、古猶ほ今のごときなり。世事の苦樂は、古猶ほ今のごときなり。變易治乱は、古猶ほ今のごときなり。既に之れを聞けり。既に之れを見たり。既に之れを更たり。百年すら猶ほ其の多きを厭ふ。況んや久しく生くることの苦しきをや」と。

孟孫陽曰はく、「若し然らば、速やかに亡ぶるは久しく生くるに愈る。則ち鋒刃を踐み、湯火に入れば、志す所を得ん」と。楊子曰はく、「然らず。既に生まれては、則ち廢して之れに任せ、其の欲する所を究めて、以て死を俟たん。將に死せんとすれば、則ち廢して之れに任せ、其の之く所を究めて、以て尽くるに放らん。廢せざる無く、任せざる無し。何遽ぞ其の間に遅速あらんや」と。

【現代語訳】

孟孫陽が楊子に尋ねて言った、「ここに ある人がいて、命を何よりも大切にし、身体を何よりも愛して、死なないことを望んでいるとします。それは可能でしょうか」と。楊子が言った、「道理として死なないものはない」と。(孟孫陽が尋ねた)「それでは、ずっと生きることが望むことは、可能でしょうか」と。(楊子が) 言った、「道理として、ずっと生きるものはない。命は、何よりも大切にせずと保てるものではない。体は、何よりも大切にせずと健康でいられるものではない。ずっと長生きすることをどうしてしなければならぬのだろうか、いやそんな必要はない。(なぜならば) 五感の好き嫌いは、昔も今も変わらないのである。身体が安全か危険かは、昔も今も変わらないのである。世間の出来事の苦しみや楽しみは、昔も今も変わらないのである。世の中の変化や治安は、昔も今も変わらないのである。(私は) このようなことをすでに聞いている。すでに見ている。すでに経験している。百年(の命)でさえもやはり長いことをうとましく思う。まして、ずっと生きることの苦しきはなおさらである」と。

孟孫陽は言った、「もしそうならば、早死にすることはずっと生きることには勝つことになりません。とすると、鋭い刃を踏み、熱湯や火の中に入れば、(早死にという) 目的が果たせません」と。楊子は言った、「そうではない。生まれた以上は、作為を加えないで自然に任せ、自分のしたいことをやり遂げて、死を待つのがよい。死に絶えようとする時には、作為を加えないで自然に任せ、自分のしたいことをやり遂げて、死に至るのがよい。すべて作為を加えないで自然に任せ、すべて自分のしたいことをやり遂げる。(そうすれば) どうして死ぬことに遅い早いがあるだろうか、いやあるはずがない」と。

【ポイント】振り返り「自己」を客観視【】 解答と照合し、自己評価と感想を記そう。

☆文構造や書き下しを理解することができた	A B C	感想
☆語句の意味や筆者の論の流れを押さえられた	A B C	

点
50点

「チームで読解力強化！漢文ロジック」ワークシートⅣ

「トレーニング10「ロジック基礎」(段落構造の理解)」現代文で学習した読解方法(「基礎プリント」の一部を次に示す)を復習しよう。

☆論理的な文章の読解では、筆者が何について(Ⅱ主題)どういうことを言いたいか(Ⅲ主張)を把握することが大切である。そのためには、論の構造を示す言葉(接続語・指示語など)に注目し、例示との関係を捉え中心文(キーセンテンス)を探す必要がある。

A 接続語 …文と文をつなぐ働きをする接続語を押さえることは、文や段落の関係を理解するための第一のポイントである。

① 説明・要約 (▽マークをつける)

(1) 前の内容を説明・要約したり、言い換えたりする。前後は同内容である。

例 すなわち・つまり・言い換えれば・いわば・要するに・こうして・このように

(2) 「Aである。つまり、Bである。」は、 $A \parallel B$ と表すことができる。

(3) 「例示」(たとえば)も、具体例で説明しているのだからこのグループに属する。

② 帰結(順接)・理由 (▷◁マークをつける)

理由と帰結の関係は「因果関係」ともいわれ、論理に最も密接に関わっている接続表現である。

(1) 「帰結(順接)」とは、前の内容を前提・原因として受けて、結論・結果を述べる表現。

例 それゆえ、だから、したがって、結論として・すると・結局・すれば・～ので・～から」など。

(2) 「Aである。だから、Bである。」を記号で表すと、 $A \downarrow B$ となる。

(3) 「理由」とは、前で言わなかった理由を述べる表現。

例 なぜなら・というのも・その理由は～からである、など。

③ 並列・添加 (□□マークをつける)

(1) 前の内容に情報を付け加える。「追加」ともいう。

$A \uparrow B$ となる。

(2) 「Aである。なぜなら、Bだからである。」を記号で表すと、

例 そして・また・および・かつ・しかも・さらに・そのうえ・それに・～とともに・と同時に・のみならず・それに加えて・まして・もう一つ・とすると

(2) 「A。そしてB。」なら、 $A + B$ と表す。

④ 逆接 (△マークをつける)

(1) 前の内容を打ち消したり、反対の内容を述べる。よって、次の⑤対比と似た働きをもつ。特に段落冒頭で使われている時に注意する。

例 しかし・だが・けれども・とはいうものの・しかるに・しかしながら・もつとも

(2) 「Aである。しかし、Bである。」なら、 $A \Downarrow B$ と表す。

⑤ 対比 (Xマークをつける)

(1) 前後の二つの言葉や文を対比させて違いを際立たせる。「対」になっている両者を比較しながら論を進める形式を対比構造といふ。評論では頻出の論理展開。

例 これに対して・～と比べて・～と違って・～と異なり・一方・他方・それとも・あるいは、など。

(2) 「Aがある。それに対して、Bがある。」も、 $A \Updownarrow B$ と表す。

☆「つながる」論理

①「説明・要約」と②「帰結(順接)・理由」と③「並立・添加」は前の話題は同じままで語られるときに使用される。また、接続語がない場合は、原則として文脈は、「説明・要約」「帰結(順接)・理由」「並立・添加」の「つながる」論理で進行していると考えられる。文と文の間にごのような論理が働いているか、自分で適切な接続詞を補って読むことが肝要である。

☆「切れる」論理

④「逆接」と⑤「対比」、他に話題転換語(ところで・さて、など)がきたら、その後は文脈が(話題の中心が)変わったと考える。「逆接」「対比」の語句があつたら、何と何が対比関係になつているかを、必ずチェックする。

B 表現 …筆者の意図が読み取りやすい表現に注意すべきである。

① 例示・例証(例えば、など)

例示は、筆者が自分の主張である抽象的な論を読者に理解させるために、それを具体的に言い換えたもの。例証は、筆者が自分の主張である論の説得力をつけるために具体的な事象をあげたもの。どちらにしても、例自体は主張を伝えるための手段に過ぎないので、本文を囲んでおく。具体例によって筆者が伝えようとしている抽象的な論が主張(具体例の前後にある場合が多い)なので、そこを押さえる必要がある。また、例は詳細(人名、書物名、法律など)なため、自分が知らないことが書かれているのは当然であること、あくまでも代わりが良く存在のため過度に気にしないこと、例は筆者に都合のよいものを選ばれること、なども理解しておくこと、あ

② 議論を保留して結論を導く表現(～ともかく・～おれいせよ、など)

これが出てきたら主張である可能性が高い。

「チームで読解力強化！漢文ロジック」ワークシートV

- ③ 補足(ただし・もつとも・なお・ちなみに、など)。
あくまで「補足」なので、並列・添加表現より重要度は低い。
- ④ 譲歩逆接構文(「もちろん・なるほど・たしかに・むしろ、など」)。「しかし・けれども・だが・ところが、など」
本文の内容について「一見そう思えること」や「一般的に常識的に思いがちなこと」をまず述べて、読者に対して一步譲った後、それとは逆内容である筆者の主張を、逆接を用いた形で述べる。意見の一般的な押しつけは反発を招くため、広い視野や常識を示すことにより、共感力・受容力があることをアピールして自分の信用度を高めようとしている。
- ⑤ 隠された真実を示す(実は・本当は、など)。
この表現の後は一般的に知られていない隠された真実が書かれる。筆者の主張は常識的な事柄ではなく、世間に知られていない意外な真理であることが大半なので、筆者の主張と考えることができる。
- ⑥ 要点列挙(まず・次に・一つ目は、第一に、など)。
要点を簡条書きに述べた表現なので、文構造の把握に役立つ。
- ⑦ 否定肯定の強調構文(「AはBではなく、むしろCである」・「AよりもBだ」、など)。
「AはBではなく、むしろCである」の場合、「むしろ」以下の肯定文は直前の否定文によって強調されているので、主張と考える。また、この場合、BとCが対比関係、逆の関係になることが多いので、本文構造の把握や空欄補充の手掛かりに使えることがある。「AよりもBだ」という表現も、比較ではなく強調として捉えることが大切である。
- ⑧ 強調の品詞(こそ・まさに、など)。
「こそ」は直前の内容、「まさに」は直後の内容を強調している。ともに筆者の主張と考える。
- ⑨ 定義文・「特徴・本質・根源・基本」などを用いた表現(〜とは〜である)。
定義文(意味を込めた文章)は、主語となるものの本質を述べた文章である。一般的な辞書的な定義ではなく、筆者オリジナルの定義が重要である。また、「特徴・本質・根源・基本」などは用いた文章は、主語||主題についての主張としてチェックする。
- ⑩ 問題提起文
疑問文は「くだらうか」の形で筆者が主題を提示している文章である。本文の主題をつかむ上で有効なので押さえる。また、その疑問に対する答えの部分が主題に対する主張となるので、答えを探しながら読み進め、答えの箇所にもチェックする。筆者は勝手に問題を投げかけ、必ず自分の答えを書くものである。
- ⑪ 最上級表現(最も〜なのは・何よりもまず、第一に、など)。
特に強調する表現なので主張が書かれる場合が多い。
- ⑫ 文末反語表現(〜ではないだろうか、など)。
読者の考えではなく、自分への同意を求めている場合は反語表現なので強調表現と考える。
- ⑬ 文末主観表現(〜と思う・〜と考え(られ)る、〜と言える、など)。
筆者は自らの思いや考えである主張を述べているので押さえておく。
- ⑭ 筆者自らが重要性を述べている表現(〜は重要である・〜に注意しなければならない、など)。
当然筆者の主張である可能性が高い。
- ⑮ 対比構造を示す表現(〜とは違う・〜と異なり、など)。
対になっている両者を比較しながら論を進める形式を対比構造といい、評論では頻出の論理展開である。対比された両者の違いをしっかりと把握しながら読み進めるが、それだけで終わらず、対比構造によって筆者が何を主張しようとしているのかを把握することが重要である。二項対立になるキーワードは無数にあるが、例えば「現在と過去」「日本と外国」「人間と自然」などである。

C 指示語 …指示語は語句を指すだけでなく、その前の文またはそれまで述べた全体を指すことがある。

日本語の文章には指示語が多く用いられる。指示語が出てくるたびに内容を確認してつぶしておくこと文章の意味が捉えやすくなる。特に段落の冒頭文に指示語がある場合は、どの段落のどこをまとめているのか、指示範囲の対象を押さえることが大切である。指示語を利用して前の段落を要約し、内容を大づかみにすることで整理できる。指示語を軽視する者もいるが、実は接続語と同じように構造を考えるヒントになるのである。

D 段落 …ある文は他の文と必ず関係を持って存在しており、段落は見逃せないものである。

① 形式段落

形式段落は筆者が意識的に文章を区切ったことを示している。このまとめりとしての段落は、他の段落と接続することで論理を生み出す。主題を提示し、具体例をあげ、予想される反論を示し、再反論を行う、というように、段落相互が接続することで、より説得力の高い文章となる。

形式段落ごとに何が書かれているか、をつかむために、以下の項目を実践するとよい。

「チームで読解力強化！漢文ロジック」ワークシートⅦ

「トレーニング11・12の解答」

- 問一 ① ② + ③ 問二 例示 [①・②・③] 主張 [④] 問三 ⑤ ↓ ⑥ ↓ ⑦ ↑ ⑧
- 問四 例示 [⑧・⑨・⑩・⑪] 主張 [⑦] 問五 [⑧・⑨・⑩・⑪] 問六 ⑫ + ⑬ + ⑭ ↓ ⑮ + ⑯
- 問七 ⑰ 問八 ⑱ ↓ ⑲ + ⑳ ㉑ + ㉒ ㉓ 問十 無為自然

「トレーニング13「ロジック強化」(発展課題)」 主張に対する適切な例示を個人で出そう。

「トレーニング14「ロジック強化」(発展課題)」 席を移動する。主張に対する適切な例示を3人組で出そう。(計2回)

(1) 楊子の発言の構造を分析する。

主張 □ ・ 根拠 ≪ ≫ 帰結

↓ 理由

↑

主張する。

なぜなら

《生非貴之所能存。》 《身非愛之所能厚。》

対句

主張する。

なぜなら

《五情好悪 古猶今也。》 《四体安危 古猶今也。》 《世事苦楽 古猶今也。》 《変易治乱 古猶今也。》

観点1～4を受ける。

したがって

再度、主張を述べる。
「百年猶厭其多。況久生之苦也乎。」

III 《既聞之矣。》 《既見之矣。》 《既更之矣。》

(2) 「II」の観点の違いをふまえて具体例を挙げる。

観点1 「個人の五感」の具体例 (五感の好き嫌いは、昔も今も変わらないのである。)	
観点2 「個人の身体」の具体例 (身体が安全か危険かは、昔も今も変わらないのである。)	
観点3 「生活・社会」の具体例 (世間の出来事の苦しみや楽しみは、昔も今も変わらないのである。)	
観点4 「国家・政治」の具体例 (世の中の変化や治安は、昔も今も変わらないのである。)	

「トレーニング15「今後に向けた課題の発見」(学びの深化)」 自己評価(該当するものをそれぞれ○をつける)と感想を記そう。

観点	A	B	C
主体性・協働性	課題解決に向けて積極的に協働しようとする姿勢をもち続けた。	課題解決に向けて協働しようとする姿勢をもつことができた。	課題解決に向けて協働しようとする姿勢をもてなかった。
読解力	論理構造に注目した読みを、継続的に行うことができた。	論理構造に注目した読みを行うことができた。	論理構造に注目して読むことができなかった。

残った疑問点

全体の感想